

被災地でみる自転車

やま だ けんいち
仙台市役所環境局震災廃棄物対策室 山田 健一

3月11日に発生した東日本大震災で被災された皆さまに心からお見舞い申し上げますと共に、残念ながらお亡くなりになられた方のご遺族に対し心から哀悼の意を表します。そして、被災地に対して全国から寄せられた言葉、活動、物資などの温かいご支援に心より感謝申し上げます。

まだ雪が舞う3月、私が住む仙台・宮城も甚大な被害を受け、被災によるライフラインの停止、食料やエネルギーの不足などが市民に与えた影響は多大なものでした。スーパーや給水所と同じようにガソリンスタンドにも市民の長蛇の列ができました。仙台を中心に極端なガソリン不足が続いたのです。そんな状況を通勤するわれわれの中で活躍したのが『自転車』です。片道10km以上を、震災の影響で隆起や陥没のあるような道路を、日常生活の復旧を信念に持ち、自転車で必死に通う職員が私のまわりには何人もいました。1ヶ月以上の間、自転車はまさに私たちの「足」として大活躍しました。便利な車社会であるからこそ、『自転車』という備えが必要なのです。

そして、被災地にも桜が咲き始めた4月、新緑が芽吹いてきた5月、私は津波により被災した自動車の処理を担当することとなり、毎日、沿岸部に足を運んでいました。被災現場には、人命捜索を継続する自衛隊・警察・消防、がれきの撤去に従事する地元建設業者、車の撤去作業を進める全国から集結した自動車解体業者、そして多数のボランティアの皆さま

が、復興に向けて各自の役割を果たしていました。皆さんの熱い気持ちに思わず目頭が熱くなったことも多くあり、そのたびに自分も！と奮い立ちました。そんな折、田園地区の集落にて被災自動車の撤去作業に立ち会っていたところ、被災した沿岸地区から仙台市中心部へ通ずる主要道路を夕陽に向かって進む自転車の集団に気がきました。日常では決して見ない光景に、どういう人達なのか、すぐには理解できなかったのですが、目の前まで来た時、腕章に書かれた「ボランティア」の文字に気付き、私はようやく、がれきの片付けを終えて宿へ戻るボランティアの皆さんであること理解しました。感謝の気持ちでいっぱいになると同時に、本当にカッコよく見えました。『遠くに見える街中のビル、目の前の被災現場、それをつなぐ道を夕陽に向かって走る自転車の集団。』この光景が私の脳裏にはいまだ鮮明に残っています。不謹慎かもしれませんが、読者の皆さんに写真でお見せできずに残念です。後日、確認したところ、仙台市内のボランティアセンターでは、ボランティアの「足」として自転車を用意し、貸し出していたそうです。沿岸部の被災現場は広いエリアで点在するために、全国から集まっていた皆さんがその被災現場へ行く手段として、限られた数の車を利用するよりも、『自転車』がとても効率的なものだったのです。

日常生活に戻りつつある今だからこそ、被災地において『自転車』はステキな乗り物だと思います。